G

せり～ぬ少納言

あゆちゃん、とGは心の内で呟いてみた。ここまでは難なくスムーズにいった。だけれどいざ、これを声に出して、音に変換して言ってみようとすると、何かが邪魔をしてそれをひどくはばんだ。おそらくは不安が。ぶ厚く巨大な防音壁となって。

Gは眼鏡（彼女に名前はないけれど、私たちは彼女を仮にこう呼ぶことにしよう――the glassesの少々強引な略称と、彼女自身の身に刻印されたロゴマークから）。形は横長でやや丸みをおびていて、半透明のオレンジ色のセルフレームを持つ。柄の部分には――今となってはもう大部分が剥げてしまったけれど――細かな花柄があしらわれていて、所々にはラメも入っている。人々は、かつてはGのことをとてもキレイだと言った。おしゃれだと言った。G自身も――誤解のないように今記しておきたい、Gは決して高慢なナルシストなどではなかった――自分の器量について、何らの不満も感じていなかった。

それなのに見て？　私の今のこの有様を、とGは嘆く。前述のように、美しかった花の柄は大部分が色あせてしまっていて、ラメも少しずつはがれ落ちてしまっている。フレームには細かなすり傷が目立ち始めていて、金属部には緑色の錆すらも見受けられる。そこに主観的な劣等感も相まって、今Gは自分の外見について完全に自信を失くしてしまっているのだ。こんなにみじめな気持ちになったことはなかったわ、いまだかつて。眼鏡仲間には、それは免れ得ない時の経過と、人間の側が自分たちを少々ぞんざいに扱うせいだから気にすることはないと言われている。でもGは、少なくともあゆみとGの場合に限ってはそれは全く違うと知っている、確信している。だってあゆちゃんは、でき得る限り丁寧に私を扱ってくれているもの、前から変わらずずっと。あぁ、今でも覚えている、初めて私たちが出会った時のとこ、とGは心の思い出の映写機を動かし出す。

それは駅前のデパートにある中規模眼鏡店でのこと。Gは会計カウンター隣の、比較的目立つ場所にあるショーウィンドウの二段目に置かれていた。外は十一月の肌寒い夕刻。あゆみは両足に履いたブーツのヒールの小気味良い音を鳴らしながら店内に入ってきた。アイボリー色のワンピースにダークレッドのウールのマフラー。二人はすぐに目が合った。店内には他にも多数の眼鏡が置かれていたけれど、あゆみはそれらには目もくれず、まるでGしかそこにいないかのように、磁石に吸い寄せられるかのようにすぅっとやって来たかと思えば、いきなり、

「あたし、きっと君を探してた」

と言って微笑んだ。案の定、手に取って鏡に向かって試着してみれば、Gはあゆみの顔かたちに――のみならず、表情や雰囲気にまで――完璧にフィットした。あの時あの瞬間に共有した、二人だけの特別な高揚感を、驚きと喜びを、Gはまるで昨日のことのように心の内によみがえらせることができる。

しかしそこで突然映写機は例の自信の欠如によって止められてしまう。あぁ、もはや私はあの時の私ではないのだわ。見れば見るほど最近の私は一気に老け込んで、醜くなってしまった。その原因について、Gはほとんど無意識のうちに次のように自覚している。一つには、ある時あゆみがGをかけないで見る、あのぼんやりとした世界の方が美しいとふと思ったのを感じ取ってしまったこと。そしてもう一つには、最近駅前でよく配られるあの使い捨てコンタクトレンズのチラシ

。なんと安価で便利で軽量でさりげないことか！　私なんて、とてもじゃないけれど太刀打ちできないわ！
　Gの不安。それはとりもなおさず、あゆみに捨てられてしまうのではないかということ。いや、捨てられるのならまだ良い、とGは思う。あゆちゃんのことだもの、きっと私がもっとボロボロに醜くなったって、きちんと眼鏡ケースに入れて引き出しの奥かどこかにとっておくのだわ、思い出の品として。自分に起こり得る、その遠くない未来の光景を想像するとGは今にも泣き出しそうな様相になった。それだけは――それだけはとても堪えられない。あの出会いから今まで、どんな景色だってGはあゆみと共に見てきた。春の新芽も、夏の日差しも、秋の紅葉も、冬の白い吐息も、そこに足される微妙な色合いの感情や思考まで、文字通り何もかも。それがもうできなくなる日々、ある日突然暗闇の中にひとり取り残されて、あゆみに会うことも叶わないまま、だんだんと忘れ去られていく日々を思うとGはまるで身を八つ裂きにされるかのような思いだった。しかし、
「あゆちゃん……」
　とうとうGはそう切り出すことが、その思いの丈をあゆみに打ち明けることができなかった。
　もし打ち明けることができていたならば物語の結末は大きく変わっていたのだろうか。
　それはあゆみや私たちにとってはある日突然に、しかしGにとっては周到に、やってきた。
　一月の、身を切るような寒さの早朝。空は曇天。そこへゴミ出しをしようと、寝ぼけまなこで玄関から出てきたあゆみ。道路の向かいの集積場に、ゴミの袋を三つ置き終えて、ようやくレンズのくもりをとろうとしてGを耳から外した。その一瞬、ほんのわずかのすきを見計らってGはあゆみ手から飛び出した。ためらいなく。重力に、自分の身と全ての思いを委ねるG。すぐ左方からはさらに、いつも通り肩に大きなバッグを斜めがけにして息を切らしながら立ちこぎをしている、男子中学生の自転車が迫っていた。